

秋祭り DE 地域交流

平成25年9月14日(土)～9月15日(日)

宮古市赤前小学校グラウンド仮設住宅 県立陸中海岸青少年の家

被災地である宮古市をフィールドに、流しそうめんや昔遊びなどの交流的な催しによる秋祭りを開催することを通して、仮設住宅にこもりがちの方が、ともに楽しみ交流する契機をつくりだすことを狙い実施したフィールドワークです。このフィールドワークには、被災地において継続的に支援活動に取り組んでいる「いわて銀河ネット」のメンバーにも参加していただきました。

2013年9月14日、三陸沿岸は久しぶりの真夏日となりました。木陰に涼を求めたくなる暑さの中、「秋祭り DE 地域交流『赤前流しそうめん大会』」が、宮古市立赤前小学校グラウンド仮設住宅で開催されました。全国各地から集まった学生9名が、会場の準備にとりかかります。竹を数本組み合わせる流しそうめんを作るのですが、これがなかなか安定しません。学生たちが四苦八苦していると、見かねた佐々木自治会長さんがそっと助け舟。試行錯誤の末、2本の立派な樋ができました。佐々木会長さんには、事前の打ち合わせから当日の実施に至るまで、本当にたくさんお世話になりました。そうめんを茹でるのは女子学生の担当。屋外での調理に悪戦苦闘していると、こちらにも心強い助っ人が。なんと、赤前のお母さんたちが手伝いに来てくれたのです。実はこの祭り、食べてもらったり、楽しんでもらったりするだけでなく、準備段階から地域の方も一緒になって進める「参加型」の交流を目指していました。いろいろと話をしながら調理する学生とお母さんたち。笑顔と笑い声に包まれながら、そうめんは美味しくそうに茹で上げられていきました。



準備中に、赤前のお父さんから嬉しい差し入れもありました。地元の牡蠣や海藻を使った浜の料理、とってもおいしかったです。ご馳走様でした。学生の声に誘われ、赤前の皆さんが徐々に集まってきました。いよいよ「流しそうめん」開始です。仮設集会所からホースで水を引き、竹の樋に水を流します。そして待ちに待った「流しそうめん」の投入。真夏のような日差しの中、大きな歓声が上がります。やはり元気の良いのは子どもたち。流れるそうめんを一生懸命すくい(時には手づかみ)、豪快に食べていました。

お父さん、お母さんたちも、たくさん食べてくれました。おじいちゃん、おばあちゃんたちも、おいしいと言ってくれました。住宅の外に出ることのできないおじいちゃん、おばあちゃんには、学生たちによる「宅配そうめん」。こちらも大好評でした。このようなイベントは赤前では久しぶりのこと。「流しそうめん」を通じて赤前の皆さんと学生が集い、楽しい一時を過ごすことができました。

この日の午後にはサロン活動、夕方には花火大会を行いました。流しそうめんとは異なり、穏やかな雰囲気の中、ゆっくりと時が流れていきました。浜から吹く心地よい風に包まれながら、祭りの1日目は無事終了しました。



翌15日は、あいにくの小雨交じりの天候でしたが、サロン活動や昔遊びを通じて、心安らぐ時間を共有することができました。

この祭りを実施するにあたり、学生たちは常に赤前の皆さん一人一人に寄り添って活動しようと努めていました。自分の思いを前面に出すことはせず、相手の声に耳を傾け、共感しようとする彼らの真摯な姿勢に感銘を受けました。全国各地から集まった学生9名が作り上げた、心温まる「秋祭り」。三陸の復興に向け、輝く光を見出した2日間でした。



参加した大学生の声

初めは、このイベントの意味は何なのかと考えることがありました。私たち学生と仮設の人々が交流して何になるのだろうと思っていました。しかし、今ではこのイベントを通して皆さんのつながりを支援することになることに気づきました。とてもいい経験になりました。(高知県立大学生)

世代間交流等も目的に企画されたとのこと、その場が住民同士や学生などの交流の場となったことはもちろんのこと、イベントをツールとして、その前後においても交流のきっかけを作ることができたと思う。今後も学生として、イベントをどう利用するか考えることで、支援の幅が広がるのではないかと考えた。(立教大学生)

4日間、赤前仮設に行き、夜にチームで話し合っていくことで、一人では味わえない何倍にも増した経験を得ることができた。2日間の活動から生まれた笑顔があり、チーム一人ひとりもそれぞれ目標を立てて短期間だったが忘れられない思い出ができた。仮設の皆さんも忘れないでいてくれると嬉しいし、自分たちは得た経験ですずっともって成長していきたい。(四国大学生)